忍ぶ川

三浦哲郎

新潮文庫

忍川（しのぶがわ）

定価280円

新潮文庫 草135A

昭和四十年五月三十日 発行
昭和五十四年二月二十日 三十五刷

著者 三浦哲郎（みうらてつお）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊙ 印刷・株式会社光邦 製本 憲専堂製本株式会社
© Tetsuo Miura 1976 Printed in Japan

新潮文庫

忍ぶ川

三浦哲郎著

新潮社版

目次

忍ぶ川……七
初夜……五五
帰郷……九六
團欒……一三三
恥の譜……一七一
幻燈畫集……二〇五
驢馬……二三七
解説　奥野健男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

忍ぶ川

忍ぶ川

志乃をつれて、深川へいった。識りあって、まだまもないころのことである。

深川は、志乃が生まれた土地である。深川に生まれ、十二のとしまでそこで育った、いわば深川ッ子を深川へ、去年の春、東北の片隅から東京へでてきたばかりの私が、つれてゆくというのもおかしかったが、志乃は終戦の前年の夏、栃木へ疎開して、それきり、むかしの影もとどめぬまでに焼きはらわれたという深川の町を、いちどもみていなかったのにひきかえ、ぽっと出の私は、月に二三度、多いときには日曜ごとに、深川をあるきまわるならわしで、私にとって深川は、毎日朝夕往復する学校までの道筋をのぞけば、東京じゅうでもっともなじみの街になっていた。

錦糸堀から深川を経て、東京駅へかよう電車が、洲崎の運河につきあたって直角に折れる曲り角、深川東陽公園前で電車をおりると、志乃は、あたりの空気を嗅ぐように、背のびして街をながめわたした。七月の、晴れて、あつい日だった。照りつけるつよい陽にあぶられて、バラック建てのひくい屋並をつらねた街々は、白い埃と陽炎をあげてくすぶっていた。

「あァあ、すっかり変っちゃって。まるで、しらない町へきたみたい。おぼえているのは、あの学校だけですわ」

志乃は、こころぼそげにそういって、通りのむこうの、焼けただれたコンクリートの肌を陽にさらしている三階建ての建物を指さしてみせた。志乃はその学校に、五年、かよった。

「大丈夫だよ。あるいているうちに、だんだんわかるさ。あんたが生まれた土地だもの」

私がいうと、志乃はわらって、

「そうね。いくらなんでも、道まで変っていないでしょうから」それからまた、焼けた学校に目をもどして、「だけど、あたしね、どこもかしこも焼けたことはきいて、しってたんですけど、あの学校が焼けたことだけは、どうしても想像できなかったの。コンクリートの建物がぼうぼう焼けるなんて、とても信じられなかったんです。それが、さっきひと目みたなり、ああ、やっぱし焼けたんだとあっけなくわかっちゃいました。あの窓のせいなんですわ。コンクリートの建物が焼けるって、窓という窓が、のこらず黒くなることなんですねえ」

ひとつ、思いがけない発見をしたかのように、きれながの、すこし眼尻のつりあがった目をしばたたきながら、輪郭が焼け崩れたまま蜂の巣のようにひしめきあっている黒い窓々をながめわたすのをみて、こんどは、私がわらっていった。

「そう、いちいちひっかかっていたら、時間がいくらあってもたりないよ」

志乃は首をすくめた。

「それじゃ、御案内ねがいます。どっちがちかいかしら」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

「ぼくは、木場」
「あたしは、洲崎」
洲崎はたしか、運河を越えたむこうの街で、それでは木場からあるいてみようと、私と志乃は、陽炎の踊る電車通りをよこぎって、志乃の母校の建物の裾、道のへりに落ちている浅くほそながい翳のなかを、木場の貯水池の方へあるいていった。
志乃は、もはや帰ってきはしない私の兄を、私が最後にみた場所へ、いってみたいというのであった。そうして、ついでに志乃が生まれて育った土地を、私にみせたいというのであった。
木場は、木と運河の町である。いついってみても風がつよく、筏をうかべた貯水池はたえずさざ波立っていた。風は、木の香とどぶのにおいがした。そしてその風のなかには、目にみえない木の粉がどっさりとけこんでいて、それが慣れない人の目には焚火の煙のようにしみるのである。涙ぐんで、木場をあるいている人はよそ者だ。
私も、兄につれられて、はじめて木場をあるいたとき、泣いて、兄にわらわれた。私は、きょうだい、肩をならべてあるけるうれしさに、胸がはちきれそうだったが、それにもかかわらず目だけが泣けてくるのは、やはり風のせいであった。去年の春、三年ぶりに上京して、さいしょに木場をあるいた日にも、そのときはすでに兄は帰らぬ人になっていたが、私の胸はある怒りに燃えていたはずなのに、しきりに目だけがくもったのは、たしかに風のせいであった。私の目は、ついに木場の風になじまない、あるいは木場のなかでも、私がきまってあるくコースにひときわ木の粉が濃いのかもしれなかったが、私はもはや、それに慣れることをあきらめていた。

しかし、その日の木場は、いつもと様子がちがっていた。街のたたずまいが、へんに私にはよそよそしかった。木の山も、貯水池も、妙にまぶしいひかりを帯びて私の視線をはねかえし、木を裂く鋸のひびきもいっこうに耳になじまなかった。癖になった深川あるきで顔を見知った幾人かの人びと、煙草屋の婆さん、そば屋の出前持ち、軒をならべた製材所の門衛たち、トラックの運ちゃんたち、――私が兄に会えなくなった当座、すこしでも兄の最期がしりたくて、兄が遺した手帖を片手に訊ねまわる私を、みな刑事とまちがえて、あとで破顔一笑したそれらの気のいい人たちも、その日はなぜか、妙な目つきで私と志乃をじろじろながめ、かと思うとぷいとそっぽをむいたり、奇声をあげたりするのであった。そうして、風さえ私をよけて吹くのか、私の目は、いつまでも乾いたままなのである。

どうやら木場は、心のみちたりているときの私には無縁の街であるらしかった。

木場のはずれの、とある貯水池のふちに、私と志乃はならんで立った。風がまともから吹いてきて、水面にくだけた陽が、いちめんに、たえずちかちかとふるえていた。遠く、筏が、ふたつ三つうかんでいて、そのむこうに芥の野がしらじらとひろがり、えたいのしれない機械のひびきが、虻の羽音のようにその方からきこえた。

「ここが、終点だ。ま、こんなところさ、木場ってとこは。なんにもありゃしない」

私は水面に唾をしていった。

「いい風だわ。やっと深川へ帰った気持」

志乃は、あつい日なかに、私にさえ無縁の街を右に左にひきまわされて、けれども、風に乱さ

れた髪の毛が汗の額や頬にはりついているちいさな顔を、無邪気に風になぶらせていた。
「帰ろうか。つまらんだろう」
私は志乃をつれてきたことを後悔しながら、そういうと、志乃は、とんでもないというふうに頭をふった。
「せっかく、きたんじゃありませんか。もすこし、いましょうよ」
胸を抱くようにしてそこへしゃがむと、ぽつんといった。
「ここですか」
「ああ」と私はこたえた。
兄を最後にみた場所である。私の兄は高等工業の応用化学をでて、戦時中、海軍省の火薬研究所で魚雷をつくっていたが、戦後、どういう魂胆からか、この貯水池をもつ木材会社に入っていた。名刺をもらって、肩書をみると、いきなり、専務というのであった。兄は、この会社に五年いた。その四年目に、私は東北の田舎の高等学校をでて上京し、兄の出資で大学へかよった。私は六人きょうだいの末ッ子で、田舎の父はすでに衰えていたからである。しかし、兄には私がさして負担でもないらしかった。私は金が必要なとき、兄の会社へもらいにいって、兄はその都度、気やすく金をわたしてくれて、柳川鍋など食べさせてくれた。一年たって、三年前の春さき、しばらく会えなかった兄をひさしぶりに訪ねると、がらんとした事務室の火鉢に覆いかぶさっていた老人が、専務は席をはずしているが、多分貯水池にいるだろうといった。しんとした工場をぬけて、貯水池のふちへでてみると、春さきとはいえ、まだ冬のなごりのつめたい風が底まですき

とおった水面にたえず皺をたたんでいるというのに、兄はひとり、鳶口をもって、けれどもべつだんそれを使うふうもなく、ただ筏から筏へと、せわしなくとび移っているのであった。上衣をぬいだワイシャツ姿が痛いほど目にあざやかで、なにかしら、どきっとした。思わず、大声で兄の名をよぶと、兄はあぶなっかしい恰好で立ちどまり、それからもっとも岸にちかい筏の方へ、ゆっくりと移りはじめた。私は、コンクリートの貯水池のふちを、その筏の先端とむきあう場所へ走ったけれども、私たちが水をへだててむかいあった間隔は、十数メートルもあったのである。兄は筏のへりにひょろりと立って、なんの用だと大声で問うので、私も大声で、ほかでもない、いつもの金の無心であった。兄は大きくうなずいてみせて、事務所の机の引出に預金通帳と印鑑があるからもっていって要るだけ使えといい、きょうはべつに用があるから後日また会おうといった。私たちは、しばらくのあいだ、なんとなく沈黙して互いをみつめあっていた。兄は西日を背にうけていつもより背が一段と高くみえ、その顔は落ちくぼんだ眼窩が黒々とした影をつくって、どくろに似ていた。わかれに、金の礼をいうと、兄はその顔をぐしゃっと崩して、『あんまり、使うな』そして、鳶口を高くあげた。

それが、兄と私の別れになった。

それから、三年。いまは持ち主のかわったその貯水池が、志乃と私の目の前にあった。

「お兄さんとは、それきりですか」志乃がいった。

「それきりだ」

「その後、お兄さんは」

「死んだ」

すらりと、いえた。その言葉は、子供のころから私の舌に慣れていた。姉ちゃんは？　死んだ。兄ちゃんは？　死んだ。よい言葉だと思った。死んだ。それきりである。あと、なにもいうことはない。なにもいわずにすむのである。

「さ、いこう。なに、ただの溜池さ。いつまでみてたって仕様がないよ」

志乃をうながして、あるこうとすると、志乃はしゃがんだまま、水面にちいさく合掌して、ちぢみの衿もとからのぞいている、ほそい項の白さが目にしみた。私の靴音は、板木をうちならすように、水面に高く反響した。

それから、洲崎へいった。

洲崎は、深川でも、私が足をはこんだことのない、唯一の土地であった。兄はそこへは案内してくれなかったのである。いちど、まだ兄の会社の社長一家が、焼けだされたまま志乃の母校の教室に仮住居していたころ、そこに寄食していた兄を訪ねて、いっしょに屋上から洲崎の街を遠望したことがある。

それは、異様な街であった。けばけばしい彩りのちいさな家々が、せまい路地をはさんでぎっしりと軒をつらねていて、家々の屋根という屋根、窓という窓には、赤や白の布ぎれがいっせいに風になびいていた。田舎者の私の目には、好奇をそそるながめであった。

「あの街へいきたい」と私がいうと、「ばか」と兄は叱って、そして、ぽおっと頬を赤らめた。

洲崎は、娼婦の街であった。

電車通りまでででると、志乃に遠い記憶がよみがえった。志乃は、通りに、昔からある汁粉屋の暖簾をみつけた。

「あ、わかったわ。もう、大丈夫です」

胸の前で手をうちあわせると、私のさきに立って横町へ折れた。道はゆるい勾配をのぼってすぐ運河につきあたり、運河には幅ひろい石の橋がかかっていた。橋をわたれば、洲崎であった。

こちらがわの橋のたもとに、なにを売るのかわからない屋台があり、立てまわした葦簀のかげから、衿もとが大きくひらいたワンピースを着た顔色のわるい中年の女が、ぐったりと長椅子にもたれて通りに目をほそめていた。

「これが、洲崎橋」

志乃は、焔になめられたあとが黒い縞になってのこっている石の欄干を、なつかしそうに手のひらでぴたぴたたたき、それから、橋のむこうの空をよぎっている高いアーチを、めずらしそうに仰いで、そこに書いてある、夜はネオンになるのだろう、豆電球にふちどられている文字を、「洲・崎・パ・ラ・ダ・イ・ス」とひくく読んだ。

「パラダイスなんて、あたし、なんだかいやですわ」

志乃は、上気したように頬を赤くしてそういうと、だまってあるきだした。

志乃はすたすた橋をわたるのであった。私は、ひとりでに胸の鼓動が高まった。

私は、かつて娼婦の街をあるいたことがなかったのではない。それどころか、酒気を帯びれば友人を語らってその街へまぎれこみ、安手の遊蕩気分をみたすことがしばしばであった。けれど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor